

# 子どもの言語習得と精神発達に 与える大人の影響

ミリアム・T・ブラック

## 要 旨

母語をしっかり使いこなせる人との直接の言葉のやりとりがほとんどない場合、子どもの言語習得には深刻な遅れが生じるであろう。さらに、言語を使用する能力がなければ、子どもが人間として十全な発達を可能にするある種の精神的能力を伸ばしていくことは困難である。あるいは全く不可能にもなりうる。本論では、言語と精神の発達過程を同時に開花させている異なる段階の子どもと、大人が接する場合の有益なかかわり方を説明し、具体例を示す。これらについての情報は、両親、子どもの世話をする者、幼児の教育者、そして第二言語を教える教師にとっても多くの示唆を含むものである。

## 1. 序論

両親は毎日子どもと接している。子どもは両親をはじめ、家族と言葉を交わすほかに他の大人とも交流する。このような機会は、たとえば学校の授業や音楽のレッスンのような場で計画され、また組み込まれている。あるいは電車の中で隣に乗り合わせた親子との束の間の会話のように、知らない者同士のほんのちょっとした出会いもある。このように大人は子どもと接し言葉を交わす機会が多く、さらに長い期間にわたって子どもが徐々に能力を伸ばしていくことを目にするので、私たちは誤って次のように思い込んでいるかもしれない。つまり子どもの学習と発達に大人は常にプラスになる影響を与えているのだと。これは必ずしも正しいわけではない。それでも大人が子どもに影響を与える重要な点は、言語習得の領域なのである。母語をしっかり話せる人との直接の言葉のやりとりがほとんどない場合、子どもの言語習得には深刻な遅れが生じるということが事実に基づいて詳細に記録されている

(Luria/ Yudovich 1971, pp.36-42)。<sup>1)</sup>

しかしながら、子どもは大人が口にするばかりのことをも自分の中に取り入れていく。あいにく子どもは未熟さのために私たちが語っていることの評価はできない。そのため躊躇せずそういった誤った情報をも自分の中で発展してゆく周辺世界の理解に加えてしまう。たとえば、こんなことを母親に言われたことはないだろうか。「寄り目をいつまでもやめないと、そんなふうになっちゃうわよ。」私の場合ほんとうにそうってしまった。そのため私は母を信じた。「赤ちゃんはコウノトリさんが運んできたのよ。」「お母さんがキャベツの下にいる赤ちゃんを見つけたんだわ。」あるいは、「オレンジの種を飲み込んだら、おなかの中にオレンジの木が生えるわよ。」子どもの成長過程において間違いなく大人の役割は重要だが、子どもにとってプラスになる大人の役割とはどのようなものだろうか。これが本論のテーマである。

本論に入る前に簡単な自己紹介と、また私がなぜこのテーマを選んだのかを述べさせていただきたい。私は二十年にわたって世界中の様々な国々で、様々な年齢層の人たちに第二外国語として主に英語を、また時にスペイン語も教えてきた。自分の仕事に必要な必修単位も教授資格も取得している。母語の英語のほか、なんとか数ヶ国語にも通じている。したがって、私は自分の行っていることに自信を持っているはずであり、言語の教え方も学び方もはっきりした見解をもって然るべきであると読者は思うだろう。ところが現実はそのようではない。それどころか、五年ほどまえ私は自分の教わってきたことがらすべてに疑念を抱くようになり始めた。自分の生徒たちに私は全力を尽くしてきただろうか。それとも私はただ気楽な習慣に従ってきただけなのだろうか。私が行ってきた教授法は何らかの形で真にプラスの効果をもたらしたのだろうか。それとも賢い生徒だったら私の手助けなしに同様のことを学び取れたであろうか。さらに、自分の思いや努力とは裏腹に、もしかしたら私の教え方のためにかえって生徒の学習を阻害している可能性はないのか、という疑問が胸のうちに芽生えてきたのである。

しかし、こういった疑問と苦悩のなかでも、正直に言って自分のやり方のいくつかはうまくいっているようには思えた。問題は、なぜうまくいっているのかに対する確固とした根拠が私にはないということだった。したがって、自分の教授法にさらに磨きをかけるには、どの方向に努力をしていけば良い

のかが分からなくなってしまった。今までの自分のままでいて、何の行動も起こさないということは考えられなかった。私は自分の内面を見つめ、思い出しながら自分が教わってきたことを以前にもまして丹念に研究し始めた。子どもがどのように、どういう理由で言語を使い始めるのかということに関して、正直なところ私はあまり分かっていないことに気づかされた。専門的な文献から、言語習得に関し言及されている箇所を説明することはできるが、それが日常生活の中で子どもが言語を習得する上で、私が観察してきたことながらどう関連しているのかが理解できなかった。さらに、こういった基本的な見解を私がおもっていないのなら、第二外国語を学ぶ人たちを効果的に導いていくことなどできるのだろうか。第一言語習得に関して私がよりはっきりした考えを抱くことができれば、自分の教え方において取り組むべきより確固とした、根本的な方法と方向性を発見できるのではないかと感じた。これこそが、私が見つげ出そうと心に決めたことである。

その時から、私は見つけられる限りの情報の整理に取りかかり文献を渉猟した。調べる範囲は広がり、心理学、人間の発達史、神経心理学の各分野における実験に基づく根拠をも入手した。後に目を見張るような結果をもたらすことになるが、非常に困難が伴う事例、たとえば目も見えず耳も聞こえないヘレン・ケラーを導き育んだ教育の仕方などを私は研究した (Black 2008; ブラック 2009)。さらに一般には、学歴が高く成功したと考えられがちだが、実際には数年しか学校に行っていないイギリスのチャールズ・ディッケンズや、ヘレン・ケラーの先生であるアン・サリヴァンの伝記なども詳細に調べた。五年間の集中的な研究を終え、ようやく自分が知り得た有益な情報のいくつかを発表する用意ができた。それらの情報は、私が入手できたものなかで最も信頼できる実験データに基づくものである。

本論は、次の三部から成る。

- 1) 幼児の精神発達に必要な言語習得の重要性
- 2) 言語習得が可能となる基本的必要条件
- 3) 異なる段階の成長過程にある子どもとの大人の有益な関わり方の例

以下を読み進んでいただければ、最初の二つを正確に理解することが第三番目にそれらをうまく応用するために肝要であることが了解されるであろう。言語習得の必要条件と、子どもの全面的な発達過程における言葉の役割を明確に理解してはじめて、子どもに備わっている潜在的な力を開花させる

ことを助ける大人の関わり方を明確に記述することができる。

## 2. 言語習得と子どもの精神発達

私の研究から徐々に分かってきた最初の重要な点は、子どもの全般的な発達過程における第一言語習得がもつ特別な意義である。レフ・ヴィゴツキーとアレクサンダー・ルリヤというロシアの心理学者が記したものを詳細に読んでみると、この点が繰り返し強調されている。この二人の科学者は年齢や文化の違いだけでなく、さらに異なる種類の脳の局部損傷をもつ子どもと大人に調査を行っている。この調査データに基づいて、それぞれの成長過程における子どもの典型的なふるまい方と言語の使い方を、私たちはより正確に予想することができるようになる (Luria 1961, pp.1-62; Luria 1981, pp.43-113; Vygotsky/ Luria 1993, pp.140-231)。<sup>2)</sup>

たしかに人間の言語使用能力というのは実に驚くべきものである。この能力があれば、時空や文化を超えた人類全般に共通することがらを表現することが可能である。たとえば世界の別の地域で数世紀も前に書かれた言葉を読んで、私たちは強い感動を覚えることができる。ある言葉の美しい響きは、直ちに深い感情を呼び起こすこともできる。シェイクスピアがハムレットに言させたあの有名な「生きるべきか、死ぬべきか、……」という台詞を世界中の人々がよく知っているのには理由がある。それはハムレットの台詞が人間の普遍的な琴線に触れるからである。言語がもたらす豊かさなしの私たちの生活を想像することはできない。

それにしても、なぜ言語習得が幼児にとってそれほど重要なのか。おそらく多くの人びとは言語を使うことで子どもは人とコミュニケーションをとり、人との交わりを学べるからと答えるであろう。しかし言語にはもっと深く重要な役割がある。言語の使用は、最初は子ども自身の発話を通して、能動的で機能的な役割をもつ。発話行為それ自体が身体運動の一つなので、子どもは発話のたびにその発話行為そのものが神経的な信号を含むことになる。こういった信号の反復が神経的な認識経路に変化をもたらしていく (Luria 1966, p. 295; 1973; Luria/ Yudovich 1971, pp.23-28)。<sup>3)</sup> 言語は、特に最初は子ども自らの発話を通して、次第に精神発達過程と分かち難いものになっていく。それは独立して発達していく能力ではない。これがどのよう

にして起こるのか、言語を使用する能力がどのようにして私達の精神的な能力を発達させることができるのか、これらについて科学的に解明するためにルリヤとその研究チームは生涯を通して創意工夫を凝らした実験を行い続けた。さまざまな精神的活動の中で、言語が私たちの一部になっていくその仕方と、言語によって私たちが自分の行動を規制し、入ってくる情報を分析し、一般化し、取捨選択し、そして結論を導いていくその仕方を、ルリヤは説明している (Luria 1973, p.307)。<sup>4)</sup> 換言すれば、もし私たちに言語使用能力が欠如しているなら、今私たちが行っているような方法でものを考えることはできなくなるであろう。

子どもが徐々に話す技術を身につけていくと、言語を使った複雑な精神的作業、たとえば長い数字を記憶したり、感覚器官を通した知覚が同時になくても異なる多くの事物を連想するといった抽象的な連想が次第に可能になっていく。はじめて見ることがらに対し、抽象的な連想をする能力がなければ、何かを読むということはできない。このことについて考えてみると、アルファベットを使っている英語では少なくとも書かれた単語に、それが表す音と視覚的な類似は全くない。それにもかかわらず、読み書きができる人は書かれた単語と音を結びつけるようになっていく。さらに、言語は私たちの動きと一体化し一つになっていく。特に、連続した一つの動作から次の動作へなめらかに動く能力と一体化する。これから三つの実例を提示し、言語というものが人間の様々な種類の精神過程と一体化した必要不可欠な要素であることを明確にする。ことによると、読者が今までに完全にはその意味合いを理解していなかった種類のことがらを含むかもしれない。

### 2.1. 感覚を通しての記憶と言語によって拡張される記憶

スクリーン上に四桁の数字、たとえば2791が一瞬間きつと映し出されるとしよう。注意深い人なら、その数字が見えなくなった後もすぐさまその記憶を呼び戻すことができるだろう。しかしこれが十桁の8359592881になると、同様のことは不可能になるであろう。数字が短ければ、たいていは一瞬見ただけでも即座に思い出すことができる。これは主として感覚を通しての記憶力を使っていることになる (Vygotsky/ Luria 1993, pp.175-186)。<sup>5)</sup> 今見た例の場合のもっぱら視覚を使っていることになるが、この感覚を使った能力により、五感情報は拾い上げ、じかに心に到達する。考えなくても思

い出すことができるのである。たとえば、JR山手線の色は何色か。この情報をどうやって知るのか。毎日この電車に乗っていたら、そういった情報は自然に頭に入ってくるのである。普通は深く考えることなしに、人は毎日こういった多くの背景的な情報を取り入れているのである。

しかしながら長い数字においては、短い数字のときのように簡単には記憶できない。幸いなことに私たちは言葉を使えるので、記憶術などを使って比較的長い数字も記憶することが可能である。こういった記憶術を使うと、永久には無理としても、比較的長期にわたって情報を記憶しておくことができる(Luria, 1987)。<sup>6)</sup>日本人なら「語呂合わせ」を使って高校の歴史の授業で重要な年号を記憶したことであろう。以上が言語によって拡張される記憶の一例である。

## 2.2. 言語と抽象的な連想

次の要点を説明するにあたって、四歳以上の子どもがよくやるゲームを思い浮かべてみることにしよう。部屋の一方の側にはこのゲームのリーダー役の大人、もう一方の側には子どもたちがいる。リーダーが「歩け」または「歩くな」と言うと、子どもはその方向に動いたり、止まったりする。リーダーが「歩くな」と言っているのに、子どもが動いたりしたら、その子は元の位置に戻らなければならない。最初にリーダーのところに着いた子どもが勝ちである。さて、ここでリーダーが「歩け／歩くな」の代わりに「進め／止まれ」または「青信号／赤信号」と言ってゲームを続行させたら、子どもたちはどうするであろうか。ゲームを始める前には、子どもたちにはこのような言葉の変更は知らされていないとしよう。

驚くにはあたらないことだが、子どもたちは変更した言葉を聞いた後も何らの説明の必要もなくゲームは続行されていく。どうして子どもは、すべきことが分かっているのか。それは子どもが言語を身につけているということだけではなく、耳にした言葉と行動との間の瞬間的な抽象的結びつきを作り出す能力があるからなのである。今回の変更で特に著しいのは「歩け／歩くな」から「青信号／赤信号」である。信号機の色という象徴としての意味と行動との間の抽象的な結びつきを作り出す必要があるからである。動物の中でも、たとえば犬は一つの行動を一つの単語と結びつけることはできる。相当な苦勞の末にこういったことを身につけるわけだが、いったん覚えてし

まうと今度は違った言葉を聞いた場合には、先ほどのゲームの子どもたちのように、即座に同じ行動をとるということはない。サルやゴリラのような動物には、一種の手話を教え込むことは可能である。その結果、ある程度抽象的なレベルで、この言語を使うことはできる (Gardner/ Gardner 1989)。しかし人間の内面においてのみ、抽象概念を結びつける精神的能力を深いレベルで開花させていくことができるのである。

### 2.3. 言語と困難を伴う行為との協調関係 (自己発話と内言)

次に、読者には鉛筆を手にとっていただき、紙に自分の名前を書いていただきたい。さらに利き手でない方の手を使ってもう一度書いていただきたい。さらにその次に、手はそのままの手を使って、書き順を反対にして書いていただきたい (図1 参照)。最初の二つは、比較的容易であるが、三番目については、相当に集中力が必要であったであろうし、とてもゆっくり行うなら可能であったかもしれない。幼稚園児のとき最初に自分の名前を書くことを習った際も、これと同様の集中力を使ったはずである。書くことに徐々に慣れてくると、繰り返すことで名前を書くことに必要な手順は簡素化され、無意識的な行為になっていく。書き順を反対にして書くように求められたとき、ちょうど初めて書いたのと同じような一連の流れを追体験したわけである。

今行った実験の最中に、心の中で言葉にして考えたり、または書きながら声に出して、「上に」「下に」とか、「左に」「右に」とか、「始めは」「最後は」のように作業の確認をした読者はいないだろうか。ヴィゴツキーとルリヤは、心の中で言葉を使って考えることを「内言 (inner-speech)」と呼び、誰かと話す目的ではないのに声に出す言葉を「自己発話 (self-speech)」<sup>原注1)</sup>と呼んでいる。子どもは言語能力と精神的能力を同時に開花させているので、「自己発話」は、言語を使う必要不可欠な手段である。小さい子どもを観察して子どもの言葉に耳を傾けてみると分かるが、子どもは特定の誰かに話しているのではなく、むしろ自分の行動の一つひとつを解説していたり、行動を

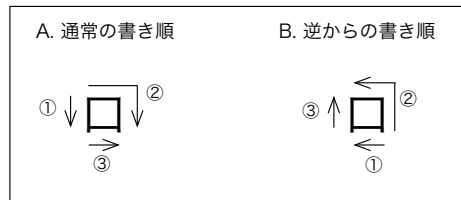


図1 漢字の書き順を逆にする

今行った実験の最中に、心の中で言葉にして考えたり、または書きながら声に出して、「上に」「下に」とか、「左に」「右に」とか、「始めは」「最後は」のように作業の確認をした読者はいないだろうか。ヴィゴツキーとルリヤは、心の中で言葉を使って考えることを「内言 (inner-speech)」と呼び、誰かと話す目的ではないのに声に出す言葉を「自己発話 (self-speech)」<sup>原注1)</sup>と呼んでいる。子どもは言語能力と精神的能力を同時に開花させているので、「自己発話」は、言語を使う必要不可欠な手段である。小さい子どもを観察して子どもの言葉に耳を傾けてみると分かるが、子どもは特定の誰かに話しているのではなく、むしろ自分の行動の一つひとつを解説していたり、行動を

はつきり順序良く整理するために、言葉を使っていることに気づく（図2参照）。

スイスの著名な発達心理学者であるピアジェも、子どもの行動を観察した多くの調査により同様のことを認めている（Piaget 1959, pp.1-49）。<sup>7)</sup> 子どもが発育途上のどの段階にあるのかにはよるが、子どもの全言語活動の40パーセント以上がふつうは自己発話であることをピアジェは観察した。さ

段階	例
① ことば遊びと繰り返し	子どもはしばしば遊びとしてことばや音を繰り返す。 例)「電車をつかまえよう！車をつかまえよう！ボートをつかまえよう！」
② 無生物のものに話しかける	子どもが一人で遊ぶとき、無生物のものに話しかけたり、それらが出す音を自分で出したりする。 例)「ブーン」といっておもちゃの車を押す
③ 自分の行動を描写する	子どもは今自分がしていることや直前にしたことをことばで表現する。 例)「この二つのブロックをくっつけるよ」と言いながらブロックを組み合わせる
④ 自分で質問し、自分で答える (内省的問答)	子どもは質問を口に出し、そしてすぐに自分で答えを言う。 例)「あれ？ブロックはどこ？」「そうだ、そこにある！」
⑤ 自分自身への指示	子どもは計画したことや次の行動を口に出す 例)「これから大きいブロックをくっつけるよ」と言ってからそのとおりにやる
⑥ 聞き取れないつぶやき	子どもは観察者が聞こえないくらい小さい声で話す

図2 コールバーグほか(1969)によるセルフスピーチの段階。Jamieson(1995, p.70)から。

らに、ヴィゴツキーとルリヤ、またその他の研究者は、生理学的な証拠と観察に基づく証拠を発見した（Vygotsky/ Luria 1993, pp.205-206; Sokolov 1972）。<sup>8)</sup> 子どもが発育するにつれ、自己発話は、ささやきになり、その後徐々に消えていき、内言になり、さらに短くまとめられ、思考として結晶化されていく。しかしながら、少し年上の子どもや大人の場合には、困難な問題に直面すると、この過程はちょうど逆の過程をたどることになる。それは先ほど読者が名前を逆から書こうとしたときに、思わずしていた自分の行動に現れている。自分の行動の手順の一つひとつ確認するために、言葉で考え、声に出して考えたり、大人は状況に応じて言語使用を調節できるように、様々



なレベルの言語の使用法を身につけている。就学前の幼児には、こういった柔軟性はまだない。これは、言語と精神の両方の発達過程のなかにいる子どもが、開花途上のある種の段階にあることを示す。本論の後ほどで、「自己発話」の概念を改めて考察することにする（図3参照）。

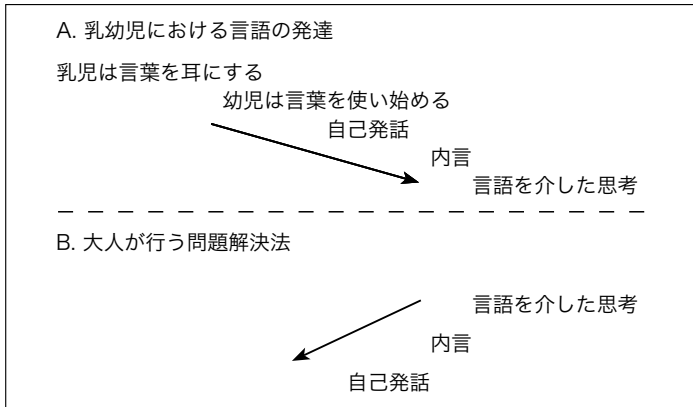


図3 乳幼児と大人の言語使用の違い

### 3. 言語習得の基本的必要条件

子どもの言語習得は本当に目を見張るものがある。日常生活のほかになちよとした努力があれば、文化や経済格差の違いに関係なく、また特別なトレーニングを受けたか否かに関係なく、ほとんどすべての子どもは数年で母語を話せるようになっていく。ある種の条件が整っているのなら、逆に子どもが言語を使える能力を獲得しないというのは、ほとんどありえないことである。したがって、言語習得がどのように起こるのかを神経学的な言葉を用いて説明することは、必ずしも必要ではない。私たちはそのことを説明できるし、その上、行動学的な言葉を使って完全に説明することができるからである。つまり言語習得は絶えることなく常に行われており、人類は言語をすばやく効率的に習得するということが、ある種の普遍的条件のもとで観察されている。この事実注目するだけでも言語習得のあり方を説明すること

ができる。この言語習得の基本的条件をしっかり理解できれば、私たちは効率よくこういった条件を整えることができるであろうし、それゆえ言語と精神の発達過程の中にいる子どもに、直接手助けとなるようなことを施すことが可能である。言語習得の基本的条件を知ること、脳の機能障害や身体に障害をもつ子どもや、ある種の環境的な条件と経験不足のために同年輩の子どもが話すようには簡単に話すことができない子どものために、助けとなるようなプログラムを考え出すことも可能になってくるであろう。

子どもの発育について学んだことがある人や、第二外国語を教えている人なら誰でも知っているように、第一言語習得に関してはかなりの数の本が書かれている。しかしながら、私はこの五年間におよぶ研究で知って驚いたのだが、言語習得における必要条件は驚くほど少ないのである。しかも普遍的であり、容易に理解できることである。それらは次に具体例を挙げて説明する三つの重要な条件に含まれている。

### 3.1. 習得すべき言語を流暢に話せる人との言葉のやりとり

明らかにしておかなければならないこととして、効率的に言語を学んでいくためには、子どもの周りにその言語をきちんと話せる人がいて、子どもはその人の話すことを聞き、言葉のやり取りを交わしていかなければならないということである (Luria/ Yudovich 1971, pp.36-42)。<sup>9)</sup> 誰もが知っているように人間には模倣する能力がある。この能力は、私たちがある種のことからをすばやく学ぶことを可能にしてくれる理由の一つである。ものごとのやり方を、全く独りで考えあぐねる必要はない。誰かのしたことのまねをすれば良い。この能力は特に幼い子どもに顕著に現れる。幼い子どもは、周りの人たちの言葉や行動を無意識的にまねている。生まれて数日または数週間の赤ちゃんが舌を出したり、しかめっ面をしたりする表情をまねることができるということも観察されている (Meltzoff 1981, pp.96-99)。したがって子どもの周りで交わされる言葉は明瞭に発音され、正確に使われることが大切である。子どもは他の子どもからも言葉を学ぶことはあるが、やはりその言語を流暢に話せる大人が、子どもに話しかけることがらを調節しながら話していく必要がある。つまり大人は様々な表現の幅を持っているので、同じことがらも多種多様に言い換えることができるからである。状況に応じて、また子どもの理解力に応じて、話し聞かせてあげることができるのである。

言語習得において、正確に使われた言葉を聞くことと、人と言葉を交わすことの重要性が、実験に基づくデータによって裏づけされている。非常に興味深い具体例が、私が読者に推薦したい本に書かれている。小さな本であり、著者はルリヤとユードヴィッチ (Luria/ Yudovich 1971)、<sup>10)</sup> タイトルは『言語と精神発達』で日本語にも翻訳されている。この本の中で著者は五歳の双生児について報告している。この双子は、言葉の面でも行動の面においても、はじめは同年代の児童に比べて、発育の遅れがあるように思えた。さらに詳しく観察した結果、この双子は大人とはほとんど言葉のやりとりがなく、保育園では二人だけで遊び話していることが分かった。その後、二人を引き離し別々のクラスにすると、他の子どもとも言葉を交わすようになった。双子のうちの一方は、研究者によって特別な言葉のトレーニングがほどこされた。双子は両方とも急速に上達していった。とくに、特別なトレーニングを受けた方はさらに上達した。約一年後、二人は同じレベルになり、さらに同年輩の子どもと言葉と行動の発達の点で同じレベルになっていった。改善されたポイントは、言葉を交わす上での言語使用者の言語水準であった。

興味深いことに、耳の不自由な子どもを調査した結果から、他の根拠があがってきている。完全に耳が聞こえる両親から、耳の聞こえない子どもが生まれてくる可能性もあるが、そのような耳の聞こえない子どもが耳の聞こえない両親から生まれる場合もある。耳の聞こえる両親のもとに生まれた耳の聞こえない子どもは言語の発達に遅れをみせ、その結果、精神の発達においても遅れをみせることが想像力を使った遊びなどを通してはっきり示されたのである。しかし耳は聞こえないが手話が得意な両親のもとに育った耳の聞こえない子どもは、こういった結果にはならなかったのである。はじめは私たちの予想とは逆の感じをうけるので驚くかもしれない。しかし納得することができる。つまり耳の聞こえない幼児が唯一理解できる言語である手話が、耳の聞こえる両親にとって普通はあまり得意ではないのである。自分の子どもは耳が聞こえないと診断された後に、なんとか手話を習うことはできるかもしれない。ただし、それでは第一言語が手話である耳の聞こえない両親と比べて、微妙な点で繊細さに欠けるのである (Jamieson 1995; Spencer/ Lederberg 1997)。

### 3. 2. すぐに意味が感じ取れる言葉に触れる

言語習得における第二の必要条件は、子どもはまず始めに、意味がただちに感じ取れる状況で言葉に触れなければならないということである。しかも具体的な状況でなければならない。子どもが五感（たとえば、物を目にし、人の行動を見て、自分自身の動きを伴って）を使いながら、意味内容を感じ取れるような特定の状況である。このような状況下で、言葉は感覚器官とも連動していき、子どもにとってはじめて意味を感じ取れる言葉となっていく。想像してみてほしい。ある大人が音楽をかけ、踊り始め、子どもにこう言う。「踊って！ 踊って！」すると、子どもはにっこり微笑み、踊り始めるかもしれない。ここには子どもを取り巻くことならにおける一連の同時進行の状況がある。つまり音楽を聴いているという状況、大人が踊っているのを目にすること、子ども自身の身体の動き、こみ上げてくる楽しい感情。こういったものが、その後「踊って！」という単語に結びついていく。子どもと言葉を交わす場合には、その言葉が状況とじかにつながっていることが重要であり、そういった結びつきがその後の基礎になっていく。そういうわけで、子どもが理解する最初の言葉や言い回しは、動きとその名称に結びつく。実例としては、まだ言葉を話せない幼児に親がこんなふうに言っているのをよく耳にする。「さあ、お口をあけて！」「にっこり笑って！」「こっちにおいで！」「お母さんにキスして！」「ボールをちょうだい！」「コートを脱ぎましょうね！」「テディーベアーはどこ？」これ以上に簡単な表現はない。

子どもが言葉の抽象的な使い方を理解するようになる過程は、はじめはゆっくりではあるが、だんだん速くなっていく。子どもは前段階で学び定着させた連想を土台にし、言葉の抽象的な使い方を学んでいく。たとえば、私の兄とその妻があるとき隣人について話していた。その隣人は最近引っ越した（“moved house”）のだと言った時だった。私の四歳になる姪がすぐさま窓のところに走って行き、こう言ったのである。「家は動いてないよ。まだそこにあるよ。」この場合には、私の姪は「動かす」という単語の意味は知っている。この知識を基にして、「家を動かす」とは、実際に「家」を動かすのではなく、家財道具一式をもって「人が」別の家へ移り住むという意味であることを説明できる。

もう一つの例についても、私の姪に登場してもらおう。今では七歳になって

いる。読むことを習っていて、身の回りの看板や掲示板上に書かれたあらゆる言葉を声に出している。あるとき、地元の町を歩いていると、DEAD ENDという言葉が姪の目に止まった。ゆっくり声に出していく。「デ、デ、デッド、エ、エ、エンド、デッドエンド！」それから心配そうに私たちの方に目をやると直ちにこう言うのである。「死んでる！ 死んでる！ パパ、死んでるって書いてあるよ！ なんで死んでるって書いてあるの？」この例でも同様に、姪はdeadという言葉の「死んでいる」という意味は知っている。この知識を基にし、“dead end”の道路とは、次の道路とはつながっていない「行き止まり」であるというように、この言葉の抽象化した意味を説明することができる。

### 3.3. 自分のための言語使用

言語習得の基本的条件の三番目は、分かりきったことのようにはあるが、子どもが自発的に自分のために言葉を使わなければならない、ということである。これまでに見てきた二つの条件を満たしていれば、子どもは自然に言葉を使い始めることになる。しかし、子どもがさらに言葉を上達させていくためには、積極的に周りの人と言葉のやりとりをする必要がある。それもきちんとその言語を話せる人との会話が大切である。子どもに言葉を話させるのは、ふつうはそれほど大変なことではない。言葉を使うことは、子どもにとって見返りが期待できるからである。たとえば、言葉を使うことで、自分が大人の行動をコントロールできることに子どもは気づく。身振り手振りよりも、効果的に自分のほしいものを伝えることができることが分かるようになる。想像してみよう。子どもが初めて「いや！」と言ったときの周りの大人の反応を。この興味をそそるような大人の反応を見て取ったときの子どもの驚きはどうかであろうか。また、「キャンディー！」という言葉を出せば、即座にキャンディーが受け取れる。こういったことから子どもは言葉を使うことの利点を直にはっきりと感じ取ることができるはずである。

言葉のやりとりにおける子ども発信型のもう一つの例として、何かを質問するという方法がある。子どもが物事に対し質問するというのは、言葉に対する子どもの意識を高めていく。それだけではなく、子どもがどのようなやり方で様々な観念を一つにまとめあげていくのか、子どもが何を考えているのかについて、子どもの心に窓を与えることになっていく。子どもの質問に

答えてあげること、さらにもっと質問するように促してあげることによって、子どもは言葉を通して自分の考えをよりはっきりとまとめあげていくことが可能になる。子どもと話をし、しっかり耳を傾けることによって、大人は子どもと一緒に体験したことがらの別の視点や、子どもが考えつかなかったような知識を与えることができる。たとえば、私の姪と私が遊んでいると、たまたま姪が私の手首を爪で引っかいてしまったことがあった。私は、ただ率直に「いたっ！」と声に出した。すると姪は笑ってこう言ったのである。「変なミリアムおばさん！大人は痛くないのよ！」私は笑って、やさしくこう言わざるを得なかった。「そうね、でも大人だって時々痛いよ。」

さらに、私が本論の前半で述べたように、子どもは言葉を発するたびに、それ自体が身体を動かす行為の一つなので、話すことは神経を媒介していることになる。したがって、話し相手のいない「自己発話」(図2参照)も軽視すべきではなく、子どもの精神発達にとって重要な要素である。それは、この「自己発話」が子どもの言語発達の最初の段階であるからである。この段階を超えると次には「内言」を使える能力が続き、その後、ある種のやり方でものごとを考える能力が生まれてくる。自己発話は、最初の土台を築きあげるのである。これによって私たちは考えを系統立てることができ、さらには言葉と自分の体験や考えや観念を関係づけていくことができる。自己発話を通して、子どもは自分が聞いたことのある言葉を試しに使ってみたり、言葉と言葉をつなげて新しい表現を作り、それを使ってみたり、自分の行動を遊びながら声に出すことによって、次にどうすべきかの道しるべにしておくことができるのである。

#### 4. 言語修得と精神発達を同時に促進するための 子どもとの関わり方

本論の最初の二つの章から言語を習得しつつある子どもに大人が与える影響のいくつかを感じ取れるであろう。順を追ってもう一度振り返ってみよう。初期段階では、子どもは言葉を使うことによって、精神的な発達過程と深い関わりが生まれてくる。したがって、子どもの精神と言語の発達を促進していく力が大人にもあることになる。人間の言語習得の普遍的パターンとして、子どもの言語使用が、先ずは自分の言葉という形で現れ、次に徐々に内面化されていくという形をとる。一般的なパターンとしてさらに言えることとし

て、子どもが言葉を理解し使い始めるとき、言葉とそれが表す行動や経験が密接につながっていくという点がある。その後こういった言葉が土台となり、その上に次第に抽象的な意味での言葉の使い方が築き上げられていくことになる。

子どもが一つの段階から次の段階に移行するとき、前の段階の上に次の段階が築かれていく。しかしながら、前段階の能力は消えてしまったわけではなく、子どもの新しい能力の一部となって残る。本論の最初に見たように、私たちが自分の名前を書き順を逆にして書いたとき、必要とあれば大人でも「自己発話」や「内言」を使うことがある。私たちが今さがし求めているのは、子どもに対しての大人の影響力の性質である。子どもが、言葉を具体的な意味のレベルから抽象的な意味のレベルで使用することが可能になるような、実際に声に出してみることから心の内面での言語使用が可能になるような、そんな種類の大人の影響力である（図4参照）。

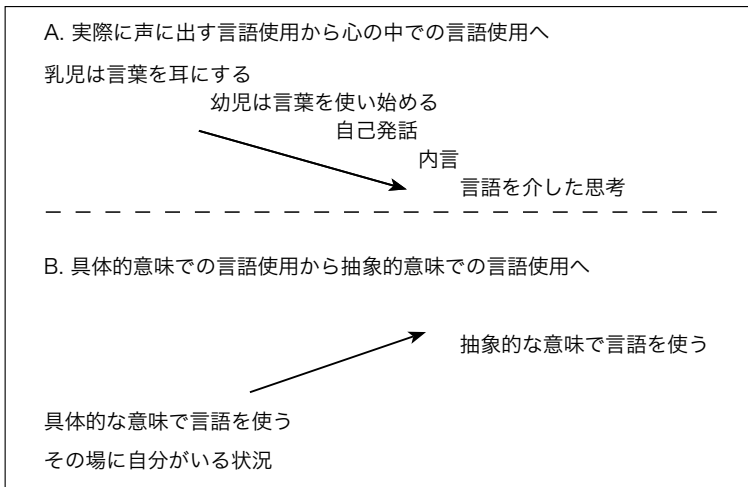


図4 乳幼児における言語発達

私の考えでは子どもに影響を与える大人の重要な役割は三つある。どれも重要であり、その重要さの度合いには順序はない。子どもが成長し、よりしっかり言葉を使えるようになってもこの役割は本質的な変化はない。子どもと言葉を交わす大人のそのやり方と柔軟性だけが変化していくのである。本論

ではこの三つの重要な役割を「指摘すること」「反応すること」「見守ること」と呼ぶことにする。

#### 4. 1. 指摘すること

読者はあまり深く考えたことはないかもしれず、または当たり前だと思っていることがらがある。それは、子どもは自分で自然に気づくようなことがらよりも、自分がそこにいる時に大人が話していることがらや、大人が子どもに指摘することがらに、より敏感に注意の目を向けるということである。たとえば、ある親子が一輪の花をいっしょに見ているとする。その親は花のそれぞれの部分について子どもに指摘し、それぞれの名称を口にするかもしれない。子どもといっしょに花びらを数えるかもしれないし、その金色の花粉を指先に取り、腕にマークを付けるかもしれない。こういった経験が子どもものの見方に修正を加えていくのである。この経験の後では、子どもは以前見ていたのと同じだの物体として花を見なくなる。その代わりに、ある種の色を持ったものとして、ある量の花びらを持ったものとして、そしてその他の特性を備えたものとして花を見ることになるのである。

言葉を通して大人が影響を与えるものの見方の変化について興味深い観察がある。ノーベル文学賞受賞作家のドリス・レッシング (1919 -) の自叙伝の一節である。レッシングは、旧南ローデシア (現アフリカのジンバブエ) で育った。幼いころカメレオンを観察したときのことをレッシングは叙述している。カメレオンが内臓を口から吐き出しているように見えたのである。叫び声を上げ、家の中に走って行った。それから母と弟といっしょにカメレオンのところに戻って行った。実際に見たのは、ハエを捕まえるためにカメレオンが舌を突き出した姿だった。それは次の描写である。

「分かったでしょ？」母は言います。「カメレオンが、餌を食べるやり方なのよ」私は泣き崩れた。母は私をまた丘の上へと連れて行ってくれた。私はこのとき大人のものを見方を身につけたのだった。カメレオンを見ると、そうだと分かっているので、長い舌を突き出すようには見えないのだが、もう二度と、実際私が最初に見たときのように見えなくなってしまった。(Lessing 1994, p.62)



ルリヤとその研究チームのメンバーは、一連の発想豊かな実験によって、大人が影響を与えることによって起こる子どもの知覚の変化に関してデータを取った (Luria 1961, pp.1-62)。ここでは詳細は省くが、要点としては、大人の行動と言葉は、良い方向にも悪い方向にも、子どもの注意を引きつける力があるということである。子どもの目を自然に引き付けてしまう物から、今までは見えていなかった小さなことから子どもの目を向けさせることができるのである。こんなふうにして、子どもは自分たちが今までに体験し、そうだと思っていた記憶や理解を修正していく。こう考えると、大人の責任は重大である。本論の序論部分でも触れた通り、私たちは有益なことがらだけでなく、見当違いで事実と反することがらも子どもに対し指摘しているかもしれない。

もう一つ、大人が理解していないかもしれないことがある。子どもに何かをしてはいけないと言う場合、実際には子どもの注意をさらに引き付けている可能性があるのである (Luria 1961, pp.6-38)。特に子どもが二歳、三歳のときには動作を伴った命令に反応することに慣れてはきているが、言葉の注意だけで自分の行動を止めるには、まだ十分に筋肉を自由に使いこなせていないのである(「ストーブに触っちゃダメ!」あるいは「待ちなさい!」)。それくらいの年齢の子どもには、指摘されたり、するなと言われることが良く分からないのである。あるいは、もう少し年齢の上の幼児なら、「マッチで遊んじゃダメ!」と言われながら理由を教えてくれない場合に、何故だろうと不思議がるかもしれない。子どもは正確に想像することがまだできないので、自分のしたことの顛末がどうなるのかについては誤った考えをもつ恐れがある。

もちろん私たちは子どもが触れる言葉や経験を完全に管理することなどできない。しかし子どもの好奇心を最高のレベルまで高めるようなことがらを、子どもに指し示すことならいくらかでも可能である。今まで子どもが自分だけでは出会ったことのない経験やことがらを提示することができる。したがって特に私たちが「最高のもの」と考えることを示すことが賢明であろう。それは書物、音楽、自然界のもの、なんであれ最も興味深く、最も美しいもの、最も人の心を引き付けると私たちが思うものである。今まで子どもが思っても見なかったことや、自分では見つけられなかったようなことを紹介し、少しでも経験させる力が私たちにはある。何かを試してみれば、子どもの好奇

心を引き出せるかどうかは分かるであろう。子どもに何かを指摘することに熟練するためには大人も自分のレベルを上げ、「良い」ものの基準に磨きをかけ続ける必要がある。このように、子どもも大人もお互い同時に学びの場に参加しているわけである。

#### 4. 2. 反応すること

幼児に関する一連の興味深い調査が1970年代に行われた(Trevarthen 1977)。その研究者は、このとき初めてとなるビデオを使った調査方法で、母親と赤ちゃんの自然な言葉のやりとりを記録した。当時、一般に赤ちゃんの行動はたいてい誰か他の人の模倣であると考えられていた。この調査が明らかにしたことは、親子のやりとりの場合、子どもが最初にやりとりのきっかけを投げかけるということである。母の方が子どもの行動の真似をするのであり、その逆ではない。さらに子どもは時として、以前に他の人がしているのを見たことがないはずの行動をとって、やりとりを始めることもあった。

一般的に言って赤ちゃんの母親は、はっきりとは気づかずに赤ちゃんの真似をしてしまっているということがある。少し思い出せば、このような光景にはよく出会っている。最初に幼児がやりとりのきっかけを出し、両親が反応するという光景である。言語習得の必要条件の一つは子どもが自分から言葉を使うということなので、子ども主導で言葉のやりとりが行われることが多ければ、それだけ言語能力を有効に伸ばしていくことができ、その結果として精神発達を促していくということになっていく。さらに、赤ちゃんに対して母親が自然に反応すれば、この必要不可欠な行動を強化していくことになるであろう。

子どもが成長し発育していくにつれ、子どもの行動に対する私たちの反応のしかた、または場合によっては反応をしないこと、そういうやり方に、私たちはさらに注意が必要になってくる。思い起こしてみよう。幼時は自分の周りのものから積極的に、はじめは五感を通して新しい情報をいつも見つけている途中なのである。したがって、私たちが反応することで子どもの発見を邪魔してしまっただけとはいかない。もちろん身体的な安全を考慮し常識の範囲での話ではあるが、子どもはひるまず何かを発見すべきなのである。たとえば、ベビーカーに乗った幼児がおもちゃを何度も何度も落としているとしよう。勘違いしている親はいらいらして子どもを叱り、おもちゃを取り上げて

しまうであろう。この親が忘れているのは子どもは重力の法則の知識なしで生まれてくるということである。幼児はおもちゃを倒すと、それが常に下に落ちてしまうことが分からない。子どもは自分でそれを学んでいく。この場合、親はこの学びの過程を邪魔していることになるのである。

さらに、前述したように、第一言語習得の過程において、子どもは自分の動きに合わせて自己発話を行うようになる。幼児期の自己発話がなければ、言語は効果的に内面化しないであろうし、その後、言語が思考と不可分のものとなっていく自然な流れをたどらなくなるであろう。親は必ずしも子どもの自己発話に反応する必要はないが、子どもにこれを止めるようにしてはならない。

子どもの質問に答えることも重要である。さらにもっと質問をさせるように促すことができればなおさらである (Black 2008, pp.7-8; ブラック 2009, 78-179 頁)。子どもの質問に答えるときは、その場ではっきり、事実に基づいて、さらに子どもの理解力に応じたやりかたであることが大切である。たとえば私が九歳のときのことである。「株式市場」という言葉を耳にした私は、それがどういうものか理解できなかった。そこで父に尋ねた。その当時、私は陶器に興味を持っていたので、父の説明はこうであった。私が陶器を作って売る会社を新しく作るとする。新しい会社を作るには、お金が必要である。そこで株を売ることでお金を集めることができるのだと。父の分かりやすい基礎経済学の説明は、今でもはっきり記憶している。

言うまでもないことではあるが、親や教師が気落ちしていたり、疲れていたり、心配事があつたり、怠慢であつたりすると、こういったことが子どもへの反応に影響する。本論の前半で紹介したルリヤが調べた双生児の事例に、このことの根拠を見ることができる (Luria/ Yudovich 1971)。<sup>11)</sup> この双生児は、はじめは精神的な疾患があるものと思われていた。家族には七人の子どもがいて、この双子は一番下である。いつも二人で遊び、母親は忙しすぎてこの子たちにはかまっていられなかった。しかし朗報があつた。ルリヤの調査研究によると、はじめは発育していくにあたって望ましくない環境にいる子どもでも、足りなかった条件を満たすことによって、同年輩の子どもと同じように成長していく可能性があることが分かったのだ。

### 4.3. 見守ること

もし私たちが子どもに影響を与えるやり方のなかで最も重要なものがあるとするなら、それは見守る者としてのものである。これが私が提示する第三番目の役割となるこの役割は過小評価されることが多く、それゆえ私は声を大にして言いたいと思う。大人が子どもに影響を与え、それが子どもの発育を促していくのは、子どもがどんな風に考え、何ができるのかということ、大人が正確に理解している場合に限る。というのは、子どもが心の中でどのように考えや経験をまとめ、なぜ子どもがこんな質問をするのかと私たちが全く分からないとしたら、適切な反応や指摘をすることなどできないからである。私たちは、子どもに対し熱心に指摘するあまり、子どもが重要な学びの最中であるという事実を見逃してしまうこともある。私たちが指摘して譲らないことが、今子どもが没頭していることとは何ら関係がないかもしれないのである。

ある特定の行動によって私たちは子どもが何を考え学んでいるのかを、より簡単に観察し理解できる機会を得ることができる。一つの方法として、子どもと具体的なゲームをし、おしゃべりをするという方法がある。これは、リラックスした雰囲気で行った方が効率的で、就寝のときや、散歩の最中、夜のドライブなどのときが良いであろう。このゲームは、自由連想や様々な言葉の反応を使って行うものである。簡単な連想ゲームで、頭にひらめいた単語を順番に言っていくものや、順番に一文ずつ文を作り、物語を作っていくゲームもある。家族で楽しめるジェスチャーゲームもある。実際、様々な年齢の家族の人たちとゲームをすることで抽象的な言葉の使い方に触れる機会が増えることになる。

姪と私は「質問ごっこ」をしてよく遊んでいる。子どもと大人が交互に、何かについて質問して、相手が答えるというものである。子どもの質問や答えにはとても興味深いものがある。たとえば「雲ってなあに？」とか「どうして目は青いか？」などである。質問する番になった者は、相手の返答に満足がいかどうかどうか決める権利があり、もし納得がいかない場合は、自分の答えを言うことになる。五歳の姪は私に質問した。「なんであたしの目は青いか？」私は何回か解答したが、どれも不正解とされてしまった。彼女はついに「正解」を言った。「だってあたし青が一番好きだから」。子どもの答えは

大人の答えとは違っているだろうが、間違っているわけではない (Vygotsky/Luria 1993, pp.155-157)。<sup>12)</sup> 加えて、このような子供の返答は貴重な資料になる。これを踏まえて、ある特定の時期に子どもが思っていることや身につけた考えを、私たちが見守る指針にしていくことができるのである。

実際問題として、私たちは自分たちが望む教育を子どもにすることができるところが、学びという仕事を行うのは子どもの方である。何かが子どもの興味を引き付ける。子どもは自分にとって意味のあるやりかたで経験したことから印象を作っていく。子どもはあるテーマに対して興味を抱く。子どもは一人で物事を理解し、経験に対し結論を出してみる。繰り返すが、子どもは学ぶという仕事をしているわけである。教師や親はせいぜい子どもの補佐役であり、学びの場に必要の条件を整えてやることはできる。その後、大人はこの場から去り、干渉しなくなっていく。子どもが何かをしているように見えて、明らかに興味を持っているときには、子どもは学んでいると言える。つまり「見守ること」とは、子どもが発育していく上で私たちが本当にできる唯一のこと、そのまま子どもを積極的に学ばせておくことに他ならない。

## 5. 結論

本論の目的は、読者に次の点を短く紹介することにあつた。

- 1) 言語は人間の精神的能力と統合され、それを伸ばしていくこと、
- 2) 必要な条件さえあれば、子どもは言語を習得することができること、
- 3) 子どもの中で統合された言語発達と精神発達の両方の過程に大人は大きな影響を与えられること。

これらの要点をより深く理解することは死生学においても重要となる。特に日本でタナトロジーが「死学」でなく、「死生学」とされることに現れているように「生」についても十分な注意を向けなければならないからである。人類は言語使用能力のおかげで地上の他の動物とは一線を画した生活を営んでいる。さらに、全人類が言語を使用しているという理由から、上記の要点はあらゆるところで応用できる。私たちはまだ知らないことが多い。どのようにして人はさまざまな仕方で考えるようになっていくのか。そういった思考形成の上での言語の役割はどうなのか。ある種の思考方法が生きていく上

でどう影響を与えることになるのか、などである。

しかしながら上記の点を総合して考えると、私たちが自信をもって子どもと接する際に、どちらにとってもより良い関わりとするための指針が導きだされる。両親、祖父母、子どもの世話役、教師、実にすべての大人にとって、その意味合いはすでに明らかであろう。たとえば、第二外国語の教師が生徒の学習の進歩に満足がいかない場合、まず検証すべきことは、言語習得の基本条件が満たされていることを決定する方法である。教師が行える最良のことは、母国語を習得していく子どもの望ましい環境を再現するような学習環境の創出に努めることである。上記の必要条件のもとでは、人が言語を習得しないことはほとんど不可能であろう。

小学校から高校までの日本の教育制度における基本テーマの一つは、子どもたちの中の「生きる力」を育むということである。しかしながら、本論の要点が示唆しているのは、「生きる力」を育むという目標は子どもが生まれたその瞬間から生じているということである。そしてこの目標には学校や日常生活の場で効果的に取り組むこともできる。というのは、自然なことながら、子どもが思考や言語能力を発達させていく必要が常に生じているからである。

子どもは、まず初期の段階で人と接することによって、そして自ら進んで物事を発見をするようにまかせられることによって、さらには言葉をよりしっかり使うように促されることによって、良い影響を受けることができる。したがって、私たち全員が子どもの成長にいくぶん責任があるということになる。だからと言って、私たちはこの事実で怖気づく必要はなく、むしろ胸をときめかせるべきなのである。というのは、学習環境にある子どもとの接し方を積極的に改善していくことによって、さらに子どものものの見方を理解しようと努力することによって、大人もまた自分たちが精神的に人と関わりあい、学びの場にあることを知るようになるからである。それがうまくいけば自信につながり、努力は実を結ぶことになる。それは教師と学生、両親と子ども、若者と年配の者、あらゆる人たちにとって有益なことである。

## 原注

- 1) 「Self-speech (自己発話)」という用語は、文献によって「private speech (私的発話)」やピアジェが使用する用語では「egocentric speech (自己中心的発話)」などと表記される。私は「自己発話」という用語を採用した。子ども自身の精神的発達にとっての道具の役割という観点から、これが最適な表現であると思うからである。

## 訳注

- 1) ルリヤ 1969、32-40 頁参照。
- 2) ルリヤ 1982、57-183 頁；ヴィゴツキー／ルリヤ 1987、122-232 頁参照。
- 3) ルリヤ 1976 では英訳の該当箇所 (p.295) は訳されていない。ルリヤ 1978；ルリヤ 1969、14-22 頁参照。
- 4) ルリヤ 1978、279-280 頁、第二版 (1999 年) では 315-316 頁参照。
- 5) ヴィゴツキー／ルリヤ 1987、166-180 頁参照。
- 6) ルリヤ 1983 参照。
- 7) ピアジェ 1954、1-59 頁、改訳改版 (1970 年) では 1-61 頁参照。
- 8) ヴィゴツキー／ルリヤ 1987、202-204 頁参照。
- 9) ルリヤ 1969、32-40 頁参照。
- 10) ルリヤ 1969 参照。
- 11) ルリヤ 1969 参照。
- 12) ヴィゴツキー／ルリヤ 1987、140-144 頁参照。

## 参考文献

- Black, M. (2008): "Learning from Helen Keller," *Toyo Eirwa Journal of the Humanities and Social Sciences*, 25, pp.1-12.
- ブラック、ミリアム・T. (2009): 「ある子供の理解—ヘレン・ケラーがはじめて『死』と出会ったとき—」(笠谷美穂訳、原文: Miriam T. Black, "One Child's Understanding: A Description of Helen Keller's First Encounters with Death") 『死生学年報 2009 死生学の可能性』リトン、171-188 頁。
- Gardner, R. A., Gardner, B. T., and Van Cantfort, T. E. (eds.), (1989): *Teaching Sign Language to Chimpanzees*, Albany, NY: State University of New York Press.
- Jamieson, J. (1995): "Visible Thought: Deaf Children's Use of Signed and Spoken Private Speech," *Sign Language Studies*, 86, pp.63-80.
- Lessing, D. (1994): *Under My Skin, Volume One of My Autobiography, to 1949*, New York: Harper Collins Publishers.
- Luria, A. R. (1961): *The Role of Speech in the Regulation of Normal and Abnormal Behaviour*, (J. Tizard, ed.), New York: Pergamon Press. 1958年に University College London で行われた講義を編集。
- (1966): *Human Brain and Psychological Processes*, (B. Haigh, trans.), New York: Harper and Row, Publishers. ロシア語原著初版 1963 年 (全 2 巻の第 1 巻)。邦訳『人間の脳と心理過程』(英訳邦訳ともに完訳ではないため一致する箇所は英訳第 10 章=邦訳第 6 章のみ)。
- (1973): *The Working Brain: An Introduction to Neuropsychology*, (B. Haigh, trans.), London: Basic Books, a division of Penguin Books, Ltd. ロシア語原著初版 1973 年。邦訳『神経心理学の基礎』。
- (1981): *Language and Cognition*, (J. V. Wertsch, trans.), New York: John Wiley & Sons, Inc. ロシア語原著初版 1979 年。邦訳『言語と意識』。
- (1987): *The Mind of a Mnemonist*, (L. Solotaroff, trans.), Paperback reprint, Cambridge, MA: Harvard University Press. (First edition of Eng. translation, 1968, Basic Books) ロシア語原著初版 1968 年。邦訳『ルリヤ偉大な記憶力の物語』。
- , and Yudovich, F. (1971): *Speech and the Development of Mental Processes in the Child*, (O. Kovasc/ J. Simon, trans.), Middlesex, England: Penguin Education, Penguin Books Ltd. (First edition of Eng. translation, 1959, Staples Press) ロシア語原著初版 1956 年と 1957 年。邦訳『言語と精神発達』。
- Meltzoff, A. (1981): "Imitation, Intermodel Co-ordination and Representation in Early Infancy," G. Butterworth (ed.), *Infancy and Epistemology, an Evaluation of Piaget's*



- Theory*, Brighton, Sussex: The Harvester Press Limited, pp.85-114.
- Piaget, J. (1959): *The Language and Thought of the Child*, (3rd edition, reprinted 1997), (M. Gabain/ R. Gabain, trans.), London: Routledge. フランス語原著初版 1923 年。邦訳『児童の自己中心性』。
- Spencer, P., and Lederberg, A. (1997): "Different Modes, Different Models: Communication and Language of Young Deaf Children and Their Mothers," L. B. Adamson and M. A. Rowski (eds.), *Communication and Language Acquisition: Discoveries from Atypical Development*, Baltimore, MD: Paul Brooks, pp.203-230.
- Sokolov, A. N. (1972): *Inner Speech and Thought*, (G. Onischenko, trans.), New York: Plenum Press.
- Trevarthen, C. (1977): "Descriptive Analyses of Infant Communicative Behaviour," H. R. Schaffer (ed.), *Studies in Mother-Infant Interaction*, London: Academic Press, pp.227-270.
- Vygotsky, L. S., and Luria, A. R. (1993): *Studies on the History of Behavior: Ape, Primitive, and Child*, (V. I. Golod/ J. E. Knox, trans.), London: Lawrence Erlbaum Associates. ロシア語原著初版 1930 年。邦訳『人間行動の発達過程』。

## 邦訳文献リスト

- レフ・セメノヴィチ・ヴィゴツキー／アレクサンダー・ロマノヴィチ・ルリヤ 1987:『人間行動の発達過程』(大井清吉／渡辺健治監訳) 明治図書。
- ジャン・ピアジェ 1954:『児童の自己中心性』(大伴茂訳) 同文書院(改訳改版 1970 年)。
- アレクサンダー・ロマノヴィチ・ルリヤ 1969:『言語と精神発達』(松野豊／関口昇訳) 明治図書。
- 1976:『人間の脳と心理過程』(松野豊訳) 金子書房。
- 1978:『神経心理学の基礎: 脳のはたらき』(鹿島晴雄訳) 医学書院(創造出版、第二版、1999 年;「新樹会」創造出版、第二版版を 2003 年再出版)。
- 1982:『言語と意識』(天野清訳) 金子書房。
- 1983:『ルリヤ偉大な記憶力の物語: ある記憶術者の精神生活』(天野清訳) 文一総合出版。

(翻訳 竜崎克巳)

# The Adult's Influence on Young Children's Acquisition of Language and the Development of Their Mental Processes

by Miriam T. BLACK

## Abstract:

If children have few chances to interact directly with skilled users of their mother tongue, they will be seriously delayed in their acquisition of language. Furthermore, without the ability to use language, it is difficult, or maybe even impossible for children to develop certain mental skills that will enable them to fully develop as human beings. In this article a description and examples of some helpful kinds of adult interaction with children at different stages in their concurrent development of language and mental processes will be presented. This information has many implications for parents, caregivers, teachers of young children, as well as teachers of second languages.